

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより
第57号

2021(令和3)年9月26日

(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

小倉織の復活と再生 — 地域の伝統文化を未来へと —

九州に「小倉織(こくらおり)」と呼ばれる綿織物があります。丈夫で美しいたて縞が魅力の織物です。その小倉織の復元と再生に取り組まれた築城則子氏の活動が契機となり、現在では北九州市立自然史・歴史博物館内に、「小倉織協議会」が置かれています。『小倉織—江戸時代から愛された木綿織物』(平成27年、小倉織協議会編集発行)には、同協議会について以下のように記されています。

「江戸時代の初めに小倉で生まれ、全国で愛用された小倉織でしたが、昭和の初めにはほとんど姿を消してしまいました。30年ほど前、小さな布きれに魅せられて小倉織の復活に灯りを点した築城則子に続き、小倉織の制作や史料の調査をする人々、機械織りの会社や小倉織の布を使った製品を作る人々も生まれました。2010年から3年間、小倉織が経済産業省のJAPANブランド事業に選ばれ、海外見本市や国内展示会を開催することで知名度を上げる成果がありました。

JAPANブランド事業の終了後、参加した小倉織に関するメンバーで小倉織協議会を結成しました。北九州の誇る伝統文化である小倉織を、より多くの方々に知っていただき、広く愛用していただく事で未来まで繋げていきたいと願って活動しています。」(31頁)

この夏、ご縁をいただいてその協議会のメンバーのお一人でいらっしゃる(一社)豊前小倉織研究会の代表、大和恵子氏より小倉織に関する資料を頂くことができました。小倉織研究会については以下のように記されています。

「平成7(1995)年、市民文化講座をきっかけに豊前小倉織研究会が誕生しました。かつて小倉織は、日本中の人々に愛用されていたにもかかわらず、その歴史がほとんど分かっていないことを知って、史料をさがして調査を始めました。残されている小さな布片や文書に書かれている事柄を参考にして布を復元することで、小倉織をより深く知ろうと試みています。

郷土の大切な文化である小倉織の歴史や特徴を、たくさんの方々に知っていただきたいという願いから、講座や紡ぎ、染め、織りの体験学習会を開いています。

昔からこの地域で栽培されていた和綿を育て、糸車で紡ぎ、天然の染料で染めて帯などを織っていますが、畑で育てた綿は弾力と光沢があり、美しい糸が生まれます。このように、綿の手触りを楽しみながら、日ごろの生活の中で長く愛される布を織りたいと、日々手を動かしています。」(前同書28頁)

市民講座がきっかけで、地域の伝統織物の研究、復元、再生、伝承に取り組む人々が現れ、充実した活動を展開してこられた様子は、京都府山城郷土資料館で開催された「相楽木綿」展をきっかけに「相楽木綿の会」が誕生し、現在の相楽木綿伝承館の活動へと発展してきた姿と重なります。

地域の歴史と伝統文化への理解を深め、一度は途絶えてしまった技術を復元、伝承する取り組みは、かつての木綿織物の産地では全国各地で行われています。

奈良県にも、幕末から明治期にかけて全国に名を馳せた「大和緋」があります。「大和機(やまとばた)」とともに、より多くの方々に知っていただくことで、新たな動きへとつながることがあるかもしれません。 『小倉織』の冊子 →



----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 令和3年8月24日～令和3年9月23日)

栃木県1、東京都1

【H.A.M.A.木綿庵】(令和3年8月24日～令和3年9月23日)

メールを含む各種相談件数4、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数3件6名



《綿の栽培記録 2021》－ 令和3年度版 その8－

天理市乙木町における梅田の感覚的観測データです。○=晴れ。△=曇り。×=雨。○/×=晴のち雨。○|×=晴時々雨。
△:×=曇り一時雨。

8月24○、25○、26○、27○、28○、29○、30○、31○、9月1○|△、2×、3×、4×|△、5△、6○|△、
7△|○、8×|△、9△|○、10○|△、11×|△、12×、13△|○、14×、15△、16○|△、17×、18×/△、
19○|△、20○|△、21△|○、22△|×、23○、24○、25○/×、26×/△。

8月24日から31日まで8日間連続して晴天がつづいたおかげで、綿が元気に吹きだしました。ところが、9月に入り、一転して短い周期で雨が降るようになり、綿にとっては厳しい9月となりました。ただ、その合間の晴天をねらって、綿摘みをつづけています。そして9月下旬を迎え、いよいよ収穫盛期から最盛期に入りました。綿は「日和草」とも呼ばれ、何よりも晴天を好みます。9月～10月の天候がその年の収穫量を左右します。江戸時代の綿作農家にとっては、綿の栽培は大きな「賭(かけ)」でもあったようです。当時の人々の祈るような気持ちが、ほんの少しながらわかるような気がします。

写真は左から1号畑の和綿エリア、5号畑の和綿、1号畑の洋綿エリア、洋綿のコットンボール



写真は左から和綿の収穫風景、収穫した実綿の天日干し、洋(上)と和のコットンボールの比較、和綿のコットンボール



【綿の加工の作業記録】 (梅田 1 人の作業量)

・糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿：平成30年, 2018年産。丹羽正行氏による打ち綿)

8月24日～9月23日 (作業実日数13日) 糸の総量37.4 g (10.0匁) 総時間121分 (2時間1分)

※1分間≒0.309 g 1時間≒18.5g (4.9匁)

【研修等の記録】

- ・令和3年08月31日 映像作家保山耕一氏とスタッフが来畑。前後1週間ほどにわたり綿畑を撮影される。
- ・令和3年09月09日 (株)養徳社制作YouTube『ふふさんぼ』#6 が配信され、木綿庵が紹介される。
- ・令和3年09月15日 NHK奈良テレビの番組「ならナビ」で、当庵の綿畑で撮影された映像が放送される。
「やまとの季節七十二候『山の辺の綿、はぜて』」(2分22秒。撮影：保山耕一)
- ・令和3年09月16日 (株)養徳社制作YouTube『木綿の郷』にて、当地収録「#1 綿繰り」が配信される。
- ・令和3年09月18日 木綿庵の取り組みについて、スタッフと共に(株)読売奈良ライフの取材を受ける。